大いなる小屋

江戸歌舞伎の祝祭空間

服部幸雄

hattori yukio

講談
学術

大いなる小屋

江戸歌舞伎の祝祭空間

常州大学図書館
藏書章

服部幸雄

講談社学術文庫

服部幸雄（はっとり　ゆきお）

1932～2007。名古屋大学卒業。千葉大学名誉教授。歌舞伎，芸能，文化史研究家。
著書に，『歌舞伎成立の研究』『変化論　歌舞伎の精神史』『市川団十郎』『歌舞伎のキーワード』『江戸歌舞伎』『江戸の芝居絵を読む』『歌舞伎歳時記』『江戸歌舞伎の美意識』『歌舞伎ことば帖』『市川團十郎代々』『江戸歌舞伎文化論』『歌舞伎の原郷』『宿神論』など多数ある。

講談社学術文庫

定価はカバーに表示してあります。

大いなる小屋
江戸歌舞伎の祝祭空間
服部幸雄

2012年5月10日　第1刷発行

発行者　鈴木　哲
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話　編集部（03）5395-3512
販売部（03）5395-5817
業務部（03）5395-3615
装　幀　蟹江征治
印　刷　豊国印刷株式会社
製　本　株式会社国宝社
本文データ制作　講談社デジタル製作部

© Noriko Hattori　2012　Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，購入書店名を明記のうえ，小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお，この本についてのお問い合わせは学術図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。
本書のコピー，スキャン，デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

ISBN978-4-06-292111-4

目次

大いなる小屋

芝居小屋論序説……9

I

都市の中の芝居町……34
櫓……69
積物・看板・提灯……83
鼠木戸……132
桟敷……150
上手・下手……164
橋・道……195
船……214
幕……228
稲荷町……242

II

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

役者の紋……260
役者の名……281
見　得……306

Ⅲ

讃州金毘羅大芝居訪問記……334
現代につくりたい「芝居小屋」……353

あとがき……383
平凡社ライブラリー版あとがき……387
解説　「戯場国」の空気感……390　如月小春
学術文庫版解説　楽しき芝居小屋への思い……396　川添　裕
付録　歌舞伎劇場研究の過去と現在……401

大いなる小屋

江戸歌舞伎の祝祭空間

服部幸雄

講談社学術文庫

目次

大いなる小屋

芝居小屋論序説……9

I

都市の中の芝居町……34
櫓……69
積物・看板・提灯……83
鼠木戸……132
桟敷……150
上手・下手……164
橋・道……195
船……214
幕……228
稲荷町……242

II

役者の紋……260
役者の名……281
見　得……306

Ⅲ

讃州金毘羅大芝居訪問記……334
現代につくりたい「芝居小屋」……353

あとがき……383
平凡社ライブラリー版あとがき……387
解説　「戯場国」の空気感……390　如月小春
学術文庫版解説　楽しき芝居小屋への思い……396　川添　裕
付録　歌舞伎劇場研究の過去と現在……401

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大いなる小屋

江戸歌舞伎の祝祭空間

芝居小屋論序説

もうひとつの別天地

戯場国の天は天井と云ふ。天色玄く黄にして、青天を見ることなし。いたつてすゝびけがれたる色にて、時候不順ゆへなるか、炎天に雪の降ること有り。又、天より花の散ること間々あり。此国の天は、木に竹を以てつぎ合せたるがごとし。ゆへにかくのごときか。時によりては提灯にひとしき光り物あらはれ、天界より覗く事有り。天人に似て天人にあらず。若あやまちて細引の糸をおとす時は、下界もつての外騒動す。

右の文は、享和三年（一八〇三）刊『戯場訓蒙図彙』に出ている。

この本は、江戸の戯作者式亭三馬の著したもので、劇場をひとつの国と見なし、そこで行われる演劇の内容や演技・演出、さらには役者や観客の様子をも含むいっさいを、この「戯場国」に特有の現象・風俗と把え、それらと現実日常世界の現象・風俗とを対比し、ことさらに驚いてみせたり、不思議がってみせたりする。そこにおのずから生まれる滑稽を楽しませようとする意図で書かれている。

そういう戯作者流の一趣向と承知のうえで、劇場と観客と演劇そのもの、その三つをひとつに統一する観念上の総体として、「戯場国」と名づける一宇宙を設定したことの意味は深いものがあると思う。

江戸の庶民大衆は、吉原の遊里を指して、北里（ほくり）・北州（ほくしゅう）と呼び、また「アリンス国」とも名づけて、これをひとつの別天地と見なした。その吉原と並ぶ戯場国もまた、日常性を拒否する非日常的時空に他ならなかった。そして、この二つの宇宙は、為政者の側の命名によれば、倫理的「悪」の世界、いわゆる悪所場（あくしょば）であった。

本書の序章に代えて、江戸時代の劇場と観客について、「現代」がいささかの考慮を払ってもよいのではないかと思われる点を述べておきたいと思う。

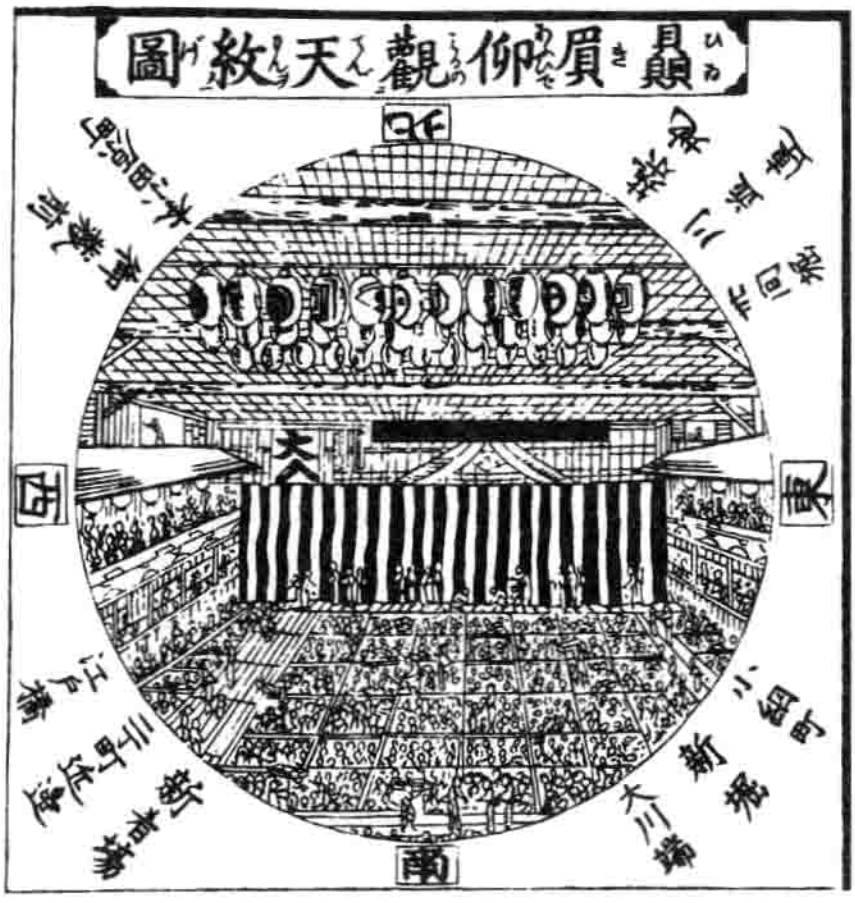
戯場国の「天」

まず冒頭に掲出した『戯場訓蒙図彙』の一文を、もういちど、ゆっくりと読んでいただきたい。三馬の言っているところの意味が、よく理解されただろうか。

そこでひとつお伺いすることにしたいが、三馬がここで「天」と措定しているところ――すなわち大いなる天井――は、観客席の上方なのであろうか、それとも舞台の上方なのであろうか。

『戯場訓蒙図彙』には、前掲の文と同じページに「贔屓仰観（ひいきあおいでてんもんをみるのず）二天紋一図」というものが掲げられている。これには、桟敷や土間や切落（きりお）とし（入場料の安い大衆席）に坐った大入りの観

客たちが、場提灯の吊られた天井を仰ぎ見る形になる内部全貌図が描かれている。そして、説明にも、「易に言うところの『仰観二天文一』というのは、日月星宿の事を指す。戯場で言うところの『仰観二天紋一』とは、切落としの贔屓連が、『イヨ親玉に二つ玉』『金箱大明神さま』などと役者を誉めながら仰向く時、必ず天井に飾ってある場提灯が目につくし、また『紋』とは、提灯に付いている役者の定紋を指す。そこで『仰観二天紋一』と言うのだ」とこじつけている。



贔屓仰観天紋図（『戯場訓蒙図彙』挿絵）

これらを参考にして考えると、先の「戯場国の天」とは、まさしく観客席の上方の天井を指すと思われ、それはそれでおもしろい見立てだと思う。ところが、その解釈に立って、そのつづきの文を読み進むと、いささか理解が難しくなってくる。

「炎天に雪が降り、天から花が散ってくることが時々ある。時には提灯みたいな光り物が現れる。これは天界の人（？）が動かしているらしく、もしうっかりして細引きの糸を落としたら、下界では大騒動が起こる」とある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com